

平和博物館と軍事博物館の比較
- 比較社会学的考察 -

村上登司文

京都教育大学

広島大学平和科学研究センター客員研究員

**A Comparative Sociological Study of Peace Museums and
Military Museums**

Toshifumi MURAKAMI

Kyoto University of Education

Affiliated Researcher, Institute for Peace Science, Hiroshima University

SUMMARY

This paper compares peace museums and military museums in Japan and foreign countries. It analyses the features, social functions of both peace and military museums,

and considers the social influence on both museums. A public relations facility of the Self Defense Forces is regarded as a military museum in Japan, so the development and contents of the exhibition of such public relations facilities are analyzed. A half of them were established in a period between 1964 and 1969. Three new large public relations facilities by each SDF were established and they gather a lot of visitors. The contents of the exhibition are shifting from a type succeeding former army to a type explaining the SDF.

The ways to exhibit wars are different between peace museums and military museums. A social function of peace museums in Japan and other countries is to succeed the last war experience to the next generation. They let visitors determine not to repeat a disastrous war and have the will for a peaceful world. As a potential function, visitors are led to pacifism opposing any war and distrust to patriotism that causes war.

On the other hand, a social function of military museums is to succeed the defense war and the liberation war. They let visitors to consider national defense and enlighten their patriotism. War memorials and national graveyards commemorate those who died on duty in wars for their motherland. Compared with peace museums, military museums in the world have a bigger number of their establishment, a longer history, and larger in scale. The social influence of military museums in the world is bigger than that of peace museums.

はじめに

平和博物館は 1990 年代以降日本国内に多数開設されている。他方、米英をはじめ外国には戦争を展示する軍事博物館が多くあるが、その実態は日本にはあまり知られていない。しかし、日本にも自衛隊広報施設が数多く開設されており、最近では国内に三つの大規模広報施設が開設された。国内・国外に開設されている平和博物館と軍事博物館を比較対照した研究は今まで行われていない。本論では、平和博物館と軍事博物館の比較を行い、さらに日本と外国との比較を交差させることにより、それぞれの博物館がどのような特徴を持ち、いかなる社会的機能を果たしているかを考察する。さらに、両博物館に対し、歴史的要因、政治的要因、地域的要因などの社会的規定要因がどのように作用しているかを考察する。

1 平和博物館・軍事博物館とは

戦後 55 年以上が経って、第二次大戦における戦争体験は歴史的記憶へと変化しつつある。戦争体験の継承は、平和志向の視点からだけで継承されているわけでない。世界には戦争を展示する多くの博物館がある。戦争を扱う博物館は、大きく平和博物館（peace museum）と軍事博物館（military museum）に分けられる。それぞれの博物館はどのように定義できるであろうか。

軍事博物館とは、軍隊・兵備・戦争・軍務など、軍事に関する展示を行い、軍隊の発展に貢献するために開設され、展示方針として反戦平和的ではない博物館であると規定する。その意味で、軍事博物館は軍隊が発展するのに有利に機能している博物館といえよう。軍事博物館の多くは軍隊が直接的に開設し運営しているが、民間が独自に開設・運営しているものもある。

他方、平和博物館とは、文献、絵・写真、芸術品等の展示物を体系的に収集し、その収集物から平和について歴史的な視野を与え、平和教育の目的に役立つように一般大衆に展示する、ものである。その意味で、平和博物館は平和な

社会の形成ための博物館である¹。

ただし、戦争と平和を展示する博物館を、平和博物館か軍事博物館かのどちらかに完全に分類することは難しい。では、現在存在する博物館を具体的にどのように分ければよいだろうか。戦争と平和を展示する博物館を分類する手がかりとなる分類基準として、次のものを考えた。

まず、運営主体から判断して、軍隊が開設・運営しているものは軍事博物館に分類できよう。民間が開設したものはさらなる検討が必要である。

展示目的や展示内容において、平和志向（平和主義、国際理解、和解・許し）の度合いが強いものは、平和博物館に分類される。

平和的手段を用いてのみ平和は達成されたとする立場にあるものは平和博物館とする。正義のためには戦争や軍事力の行使は必要だという論を支持し、防衛戦争や解放戦争を積極的に肯定する展示を行っているのは、軍事博物館に近いと判断する。

平和博物館または軍事博物館のどちらかに分類されるかは、「誰が」分類するかに規定されている（社会学的相対主義）。例えば、ガイドブックの編者により特定の博物館をどちらに分類するかが異なる²。また、編者が有する情報量により、何を含めるかの範囲が規定される。

2 平和博物館・軍事博物館の実際

(1) 軍事博物館

日本の軍事博物館

『平成 12 年度版防衛白書』（2001 年 2 月）には付属資料として全国の「自衛隊の広報施設など」が掲載されている。それによれば、陸上自衛隊で 103 館、海上自衛隊で 12 館、航空自衛隊で 15 館、合計では、全国で 130 館の広報施設などが開設されている。

憲法上日本は自衛以外には軍事力を行使せず、自衛のため以上の軍隊を持た

ない。旧軍隊や自衛隊関連の史料・資料を保管し展示する施設を開設しても、「軍事博物館」の名称を使うことは難しい。

広報施設という名称を防衛白書では用いているが、実際の各施設の名称は多種多様であり、その中では資料館や史料館の名称が多い。自衛隊広報施設などは、自衛隊という軍隊のための展示を行っているという点から、軍事博物館の性格を強く有する施設ということができよう。

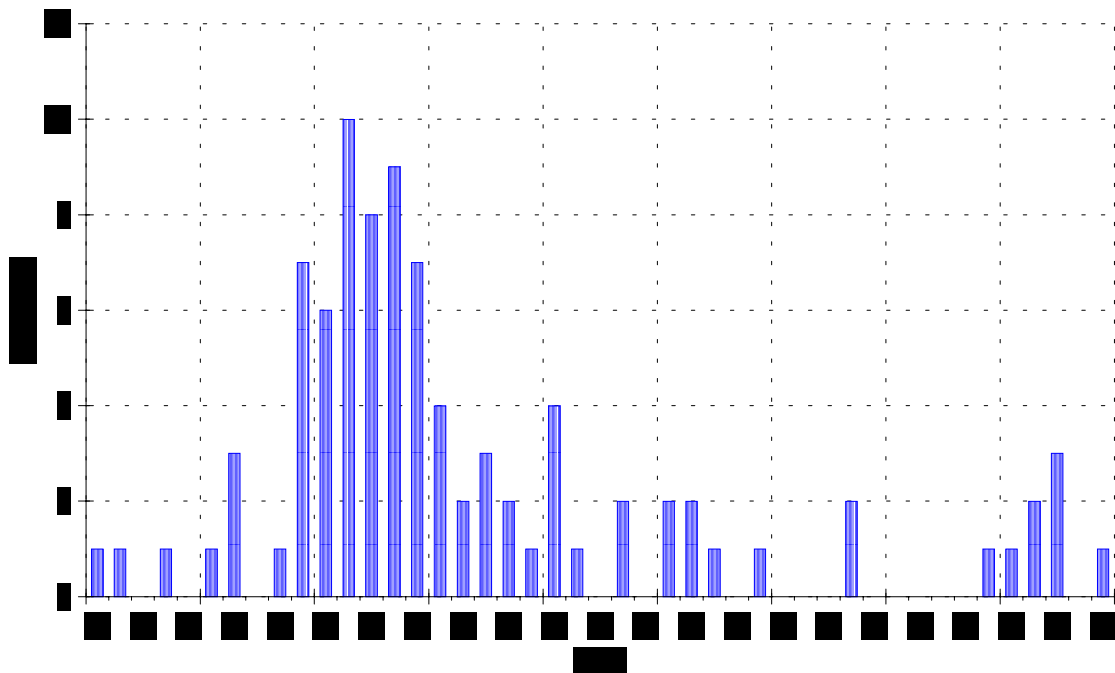
自衛隊広報施設などのほとんどは、自衛隊が開設・運営している施設である。それらは戦歴、軍服、武器、兵器、戦争の英雄などを展示し、入館者に国防意識を高めることを目的としている。そうした展示内容や社会的機能から比較対照して、「自衛隊の広報施設など」が外国の軍事博物館と同様または類似した施設ということができる。

1955 年以降、各地の自衛隊駐屯地や基地に、広報施設など（史料館を含む）が開設され始めた。図 1 で見るように、特に 1964 年から 1969 年にかけてその開設時期が集中している。開設時期が確認できた自衛隊広報施設など 90 館の内、半数以上に当たる 47 館がこの期間中に開設されている。その後開設数が減少し、特に 1980 年代後半から 1990 年代前半にかけては開設数は 3 館にすぎない。

1960 年代後半に全国一斉に自衛隊広報施設などが開設された要因としては、駐屯地・基地開設の 10 周年記念事業や 15 周年記念事業として記念施設の開設が進み、そうした動きが全国の自衛隊に広がったものと推定されよう。記念事業としての施設開設が師団長や航空隊長また基地司令の発意という形で始まり、基地全体の施策として、基地内外の人々の協力を得ながら開設にこぎ着けたようである。全国各地の駐屯地や基地に対して、防衛庁により広報施設などの開設を促す通達などの指示が、1960 年代に出されたとの資料や記述は見当たらない。ただし、金沢駐屯地からの返信によれば「中央の伝統継承の方針に基づき・・・」との記述もあり、防衛庁本部の意向があったのかもしれない。

また、各連隊の戦友会や軍学校の同窓会などが、史料館の開設への要望や展示資料の提供など、開設と展示資料の収集などに積極的に貢献している。

図1 自衛隊広報施設などの開設年



注：2001年の郵送質問調査で確認できた自衛隊広報施設など90館の開設時期を示す。

他方、1990年代後半以降、大規模な（大がかりで本格的な）自衛隊広報施設が三つ開設された。1997年に海上自衛隊佐世保史料館（通称セールタワー）がまず開設され、1999年に航空自衛隊浜松広報館（通称エアー・パーク）が開設され、陸上自衛隊広報センター（埼玉県朝霞駐屯地隣接）が、2002年4月に開館した。こうして、海・空・陸の三自衛隊の大規模広報施設が、九州、中部、関東の各地方に一つずつそろうことになった。防衛庁はこの三施設により、広報施設を通じた自衛隊広報活動を大幅に強化したといえよう。

そのことは、広報施設などへの入館者数からもうかがえる。表1は、入館数が上位の自衛隊広報施設などを順に並べたものである。これ以外の自衛隊広報施設などは、入館者数が1万人以下の小規模のものがほとんどである。表1から、最近開設された3館は、いずれも10万人以上の入館者があり、それまでに開設されていた100館以上の広報施設よりも一桁多い入館者数を集めていることがわかる。

表1の下に記した記念館みかさは、日露戦争で活躍した戦艦三笠が1926年に記念館三笠（横須賀市）となり、戦後閉館し、1961年に再開されたものである。

遊就館は、陸軍省の管轄下で 1882 年に開館し、戦後閉館し、1961 年から靖国神社の遊就館として開館している軍事博物館である³。

表 1 自衛隊広報施設などと民間軍事博物館への入館者数

開設年	施設名（駐屯地・基地等、場所）	1999 年	2000 年	2001 年
1999	浜松広報館（浜松基地）	343,374	299,425	285,153
1997	佐世保史料館（佐世保地方総幹部）	120,134	121,261	99,839
2002	陸上自衛隊広報センター(朝霞基地) (2002 年：106,746) ^{注1}	-	-	-
1972	鹿屋航空基地史料館（第 1 航空群）	75,347	83,259	90,533
1960	教育参考館（第 1 術科学校、広島県江田島）	60,091	70,220	70,924
1999	市ヶ谷記念館（市ヶ谷駐屯地、東京）	15,543	39,250	27,589
1964	北鎮記念館（旭川駐屯地）	15,112	15,021	14,320
1981	北洋館（大湊地方総監部）	10,415	5,051	11,098
1961	記念館みかさ	104,613	111,625	103,737
1986	遊就館 (2002 年：170,000) ^{注2}	-	-	-

注 1：陸上自衛隊広報センターは 2002.4.6 開館から 2003.3.23 まで約 11 ヶ月間の入館者数である。

注 2：新・遊就館開設の 2002.7.13 から 2003.2 まで 7 ヶ月半の入館者数である。

英米の軍事博物館

イギリスは、帝国戦争博物館とその分館、および陸海空の各軍隊が開設した軍事博物館があり、二つの系統に分かれているといえよう。イギリスの帝国戦争博物館は、英国文化省の管轄下にある施設である。戦争博物館は 1914 年から現在までイギリスと英連邦が関わった紛争を記録することが設立目的である。戦争博物館は、軍隊の発展を直接的な目的としたものでなく、イギリス国民に対し自国が行った戦争について詳しく展示し、戦争についての教養を高める博物館といえよう。展示方法のアプローチは、入館者に対してより客観的であろうとしており、戦争について見学者が主体的に判断できる資料を提供しようとしている。しかしながら、入館者に対する社会的機能としては、多くの国の軍事博物館の社会的機能と同様に、正義のための戦争があり、そのための軍事力

の行使は必要とのメッセージを送り、愛国心を高める働きをしているといえよう。それゆえ本論では、帝国博物館を軍事博物館の一つとして考察する。

表 2 は、イギリスの主要な軍事博物館を入館者数が多いものから順に示したものである。入館者数が 10 万人を越えた博物館をのせており、これらはイギリスの大規模で主要な軍事博物館といえよう。中でも戦争博物館の本館は 60 万人以上の入館者を集めており、ロンドンの重要な観光スポットとなっている。

表 2 イギリスの軍事博物館への入館者数

開設年	施設名	1999 年	2000 年	2001 年
1920	本館 (Lambeth Road)	495,308	661,804	646,978
(1977)	ダックスフォード	396,064	392,407	438,238
(1981)	戦時内閣の部屋 (Cabinet War Rooms) ^{注1}	291,063	304,197	274,376
1978		210,359	250,971	244,761
2002	戦艦ベルファスト 北館(マンチェスター) ^{注2} (2002.7-9 間で 198,289)	-	-	-
1960	全国陸軍博物館	242,944	266,441	284,985
1972	王立空軍博物館 ^{注3}	128,807	145,516	172,871
1963	海軍航空博物館 (Fleet Air Museum)	115,000	107,000	100,000

注 1 : 戦時内閣の部屋は 1981 年に一般に公開するように内閣で決定された。

注 2 : 戦争博物館北館は、開館後 3 ヶ月 (2002.7-9) だけで 198,289 名の入館者があった。

注 3 : 毎年 6 月に開催される航空ショーの見学者も含んでいる。

イギリスの軍事博物館においては、入館者に愛国心をあからさまに煽るのではなく、展示物を通して入館者に考えさせようとする。例えば、全国陸軍博物館を説明する資料に次の記述がある。

これらは、収集物に蓄積された知識を通して、陸軍の博物館が問いそれに答えようとしなければならぬいくつかの質問である。宝物の展示や、軍人の生活の枠組みを形作る展示物を通して、博物館は入館者達に自分で回答を発見する機会を与える⁴。

アメリカにも軍事博物館が多数開設されている。開設経緯を見れば、1846年に海軍学校博物館が開設され、1854年にはウェストポイント陸軍博物館が開設している。表3に示すように入館者数が非常に多い軍事博物館がいくつかある。

スミソニアン航空宇宙博物館は、1976年に開館し、スミソニアン博物館群の中で最も人気がある博物館である。この航空宇宙博物館は、毎年1千万人に近い入館者がある。航空宇宙博物館は23の展示室を有している。100機以上の航空機、宇宙船、ミサイル、ロケット、飛行に関するものを展示し、見学者に航空・宇宙技術の進歩を体感させる博物館である。航空宇宙博物館は、スミソニアン協会により開設運営されており、設置者の点からいえば軍事博物館とはいえない。ただし、展示室の一室が「第二次大戦の航空」であり、それは第二次大戦の軍人と飛行機を記念するものである。その展示室には、第二次大戦中のアメリカ、ドイツ、日本などの戦闘機が展示されている。それ以外の広い展示スペースで展示されている飛行機の多くが軍用機であり、1980年代前半の米ソ軍拡時代の中距離核弾頭ミサイルも展示されている。

アリゾナ記念館は、1941年のハワイの真珠湾攻撃で撃沈され沈んだ戦艦アリゾナ号の真上の海上に建てられている。アリゾナ記念館は、日本軍によるパールハーバー奇襲作戦の殉職者を追悼し顕彰する米国内務省管轄の施設である。アリゾナ記念館は1962年に開館し、その追悼の部屋では、アリゾナ号で亡くなったすべて乗員の名前が壁に刻まれている。海上のアリゾナ記念館への渡船場に、1980年に訪問者センターが完成した。そこには真珠湾攻撃のドキュメンタリー・フィルムの上映場所と展示室が設置されている。アリゾナ記念館には、1980年代後半以降毎年およそ150万人の人が訪問している。アリゾナ記念館は軍事博物館であると同時に戦争メモリアルであり、顕彰の機能が強い施設である。

オハイオ州のライト・パターソン空軍基地内にデイトン空軍博物館がある⁵。これは、1923年に開設されたアメリカで最古の空軍博物館で、展示機の質量ともに世界最大規模である。ここでは、航空機およびミサイルなど300機以上が展示されている。博物館は最初は、空軍によって建設され運営されていた。現

在は博物館財団により運営されている。この財団は、軍用機製造会社と多数のボランティア、そしてライトパターソン空軍基地将校クラブなどによって支援されている。博物館には第二次大戦中に使用された航空機が多数展示されている。展示内容の一部に、ベルリン大空輸作戦コーナーもある。

アメリカの軍事博物館は、広く一般の入館者に対してアメリカが行ってきた戦争と自国の軍隊について展示し、軍隊の必要性をアピールしているといえよう。

表3 アメリカの軍事博物館への入館者数

開設年	施設名	1999年	2000年
1976	(スミソニアン航空宇宙博物館)	9,401,990	8,999,968
1962	アリゾナ記念館(Arizona Memorial)	1,410,218	1,452,707
1923	米空軍博物館(U.S. Air Force Museum)	1,107,516	1,198,059
1982	イントレピッド海事航空宇宙博物館	-	600,00 以上
1846	米海軍アカデミー博物館	-	110,000
1973	ルイス駐屯地博物館	60,120	61,875
1968	USS Cobia/Manitowoc Maritime Museum	55,520	56,732
1991	海軍海中博物館(Naval Undersea Museum)	54,282	56,961
1966	空軍宇宙博物館(Air Force Space Museum)	21,068	42,137

(2) 平和博物館

平和博物館といっても、館によって開設までの経緯が異なり、設置目的や展示内容も異なる。平和博物館の開設目的の重点からいえば、戦争の愚かしさや恐怖を伝えて「反戦」の態度を形成することを目指すもの、あるいは平和な社会や平和な国際関係を築く「向平和」の態度や方法(スキル)を伝えることを重視するものがある。こうした重点の置き方の違いから、前者を「反戦平和博物館」、後者を「向平和博物館」と呼ぶことができよう。

日本の平和博物館の多くは、地域の戦争体験を継承することを目的として展示内容が構成されている。そうした平和博物館では、第二次大戦の戦争体験を

継承しており、「戦時下における日本国民の（否定的）戦争体験記憶を保存および活性化する」社会的機能を果たしているといえよう。

表4は、入館者が年間10万人以上の国内の平和博物館について、入館者数を見たものである。一番多いのが広島平和記念資料館で、二番目が長崎原爆資料館（旧長崎国際文化会館）である。現在までの延べの入館者数を見ると、2001年までに広島平和記念資料館では4947万人、長崎原爆資料館で4425万人となり、合計で9372万人となる。数字的には、現在の日本の人口の7割以上に相当する人々が広島または長崎の平和博物館に入館したことになる。このことからだけでも両館は日本人の多くが有する反核平和主義の形成に一定の影響を及ぼしてきたと推測される。

表4 日本の平和博物館への入館者数

開設年	施設名	1999年	2000年	2001年
1955	広島平和記念資料館	1,180,693	1,075,111	1,113,864
1955	長崎原爆資料館	891,108	835,200	808,444
1989	ひめゆり平和祈念資料館	1,006,660	918,469	758,194
1975	(知覧特攻平和会館)	573,576	540,321	719,573
1975	沖縄県立平和祈念資料館	180,247	481,078	336,245
1998	地球市民かながわプラザ	176,612	123,673	221,084
1988	舞鶴引揚記念館	151,475	143,566	167,822
1976	第五福竜丸展示館	162,026	134,092	111,568

平和博物館が開設されるためには、特定の戦争体験を継承することが重要であると、地元住民に広く認識される必要がある。特に公立の平和博物館では、地元の住民から開設への要望が高まり、開設に向けた住民運動が広がることによって首長や議会が動き、条例が制定される必要があった。

日本における戦争体験継承は、被害体験の継承が戦後長くその中心であり続け、1980年代に加害体験の反省が含まれるようになった。1990年代に入って加害体験の展示が一部の平和博物館でも見られるようになった。例えば、大阪、京都、川崎、広島、長崎にある各平和博物館の展示内容に、戦争の被害体験だ

けでなく加害体験も加えられるようになった。

世界で最初の平和博物館の開設は 100 年ほど前に遡ることができる。ポーランド系ロシア人のジャン・ブロッホ (Jean de Bloch) が 1902 年にスイスのルツェルン市に開設した国際戦争平和博物館が、反戦博物館として理解される最初の平和博物館と見なされる。武器の発達により国家間の戦争が破壊的となり、戦争は多大な犠牲を伴い、民間人の殺戮と共に社会秩序の破壊をもたらす。その展示内容では、15 世紀以降のいろんな武器の陳列と、次第に破滅的となる戦争行為の性格の説明が加えられていた⁶。

第一次大戦後には、ドイツのベルリンでエルンスト・フリードリッヒが、1925 年に「反戦博物館」を開設した。この平和博物館では第一次大戦の悲惨な戦争場面や、顔面を著しく損傷した兵士達や、共同墓地などの写真を中心に展示していた。

外国に設置されている平和博物館については、設置目的や、何を継承するか、どのような展示方法か、などが国によりまた各博物館により異なる。第二次大戦後数年が経ち、それぞれの国で戦災の復興が進み国民生活が安定してくると、1950 年代以降、各国・各地域の戦争体験を継承する場として平和博物館の開設が行われた。1990 年代には世界各国で平和博物館の開設が見られた。

世界には、戦争体験を伝達する平和博物館だけがあるのではなく、「向平和」の平和博物館がある。ジュネーブやイタリアのカスティリオーネにある国際赤十字博物館では、国籍に関係なく傷病兵を救助する赤十字の活動を紹介し展示する。インド独立の父で非暴力活動を推進したマハトマ・ガンジーを紹介する博物館がインドにある。その他、ノルウェーのノーベル平和賞関連の博物館プロジェクト、またアメリカのメンフィスにある全国市民権運動博物館なども、向平和の平和博物館といえよう。

次に、図 2 により海外の平和と戦争に関する博物館への入館者数を見てゆこう。イギリスの帝国戦争博物館は本館と四つの分館がある。本館への入館者数は 2000 年度が多く 66 万人、戦艦ベルファストは 2000 年度が 25 万人、戦時内閣の部屋は 2000 年度が 30 万人、ダックスフォードは 2001 年度が多く 43 万人、北館は開館後の 3 ヶ月間だけで 19 万人の入館者があった。これを単純に合計す

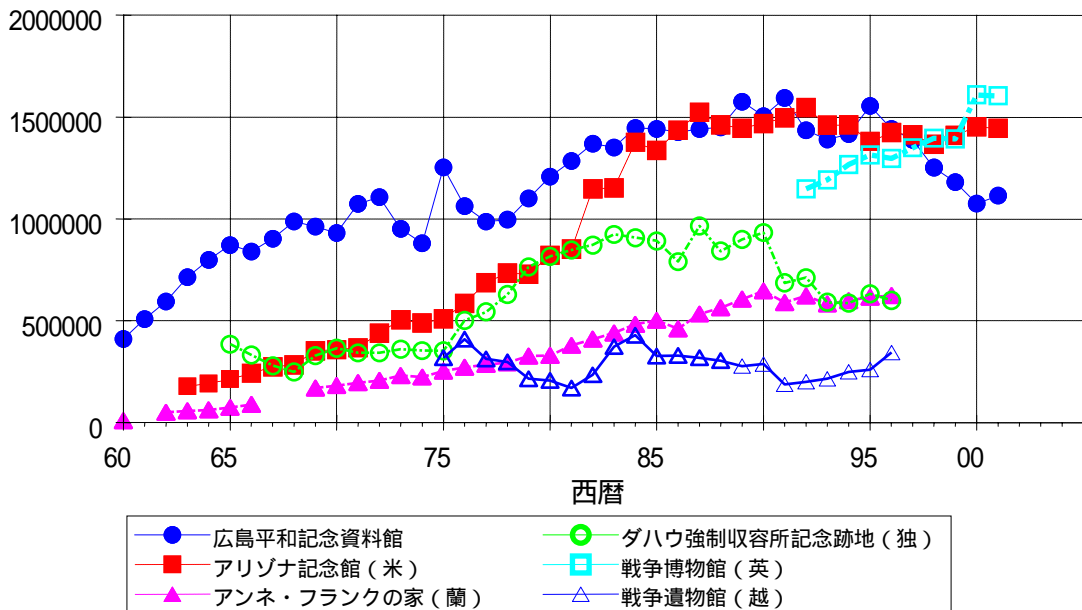
ると、183 万人に達する。

アメリカのハワイにあるアリゾナ記念館への入館者数は、1980 年代後半以降毎年およそ 150 万人の人が訪問している。これは 1990 年代前半までの広島平和記念資料館の年間入館者数とほぼ同じである。

オランダのアムステルダムにあるアンネ・フランクの家は、1960 年 5 月に開館し、1996 年の入館者数は 62 万人に達した。ナチスの強制収容所の一つのミュンヘン近郊にあるダハウ強制収容所記念跡地には、特に 1980 年代に入館者が 90 万人を越えており、ホロコーストに対する人々の関心が高まった。

ベトナムの「戦争遺物博物館」は、以前は「侵略戦争犯罪展示館」という名称であった。ベトナム戦争は 1975 年 5 月に終結し、侵略戦争犯罪展示館はその年の 9 月にベトナムのサイゴン市（現ホーチミン市）に開館している。侵略戦争犯罪展示館では、ベトナム戦争でのアメリカ軍の加害、ベトナム人の被害体験が展示されている。ただしアメリカ市民の反戦運動が戦争を終結させるのに大きな影響を及ぼしたことにも展示で触れている。入館者数には年間 16 万人から 43 万人である。

図 2 世界の平和と戦争の博物館への入館者数



戦死者名を刻印する記念碑として、沖縄の「平和の碑」とワシントンにある「ベトナム復員軍人記念碑」は対照的である。沖縄「平和の碑」は沖縄戦跡の摩文仁の丘にある。平和の碑には、沖縄戦の戦死者名をすべて記載している。つまり、民間人と軍人を問わず、また日本人と外国人を問わず、連合軍兵士、朝鮮人、台湾人の犠牲者すべての名を刻んでいる。それに対し、「ベトナム復員軍人記念碑」は首都ワシントンの政治の中心地(モール)に国立公園として1982年に設置されている。記念碑には、ベトナム戦争で亡くなった米国軍人の名前を刻み、国家のために戦った米国軍人を顕彰している。

3 比較社会学的考察

(1) 両博物館の類型化

日本と海外の軍事博物館と平和博物館について見てきた。表5では、平和博物館と軍事博物館の、社会的機能、展示内容、開設経緯を類型化した。ただし、こうした分類は一つの理念型であり、実際に開設されている平和博物館あるいは軍事博物館が表5で記載した特徴をすべて持つということではない。

日本にある平和博物館の多くは、戦争体験を次世代に継承し、二度と戦争は繰り返してはならないという反省の意識と、平和希求の意志を展示方針として前面に押し出した施設ということができよう。そうした平和博物館の開設目的は、戦争体験を継承することにより「消極的平和(戦争がないこと)」の大切さを確認することといえよう。平和博物館への付設のモニュメントは戦争犠牲者の慰霊を目的している。

表5 戦争を扱う平和博物館と軍事博物館の類型化

比較・対照項目		平和博物館	軍事博物館
社会的機能	明示された機能（開設目的）	戦争体験の継承 平和の大切さの確認	軍隊の広報 祖国防衛戦争の記録、史料の保管、 国防意識の啓発
	死者の記念	戦争犠牲者の慰霊と追悼	戦争殉職者の追悼と顕彰
	潜在的機能	平和主義への導き 戦争につながる愛国心への不信 「平和の文化」の伝達と形成	厭戦気分を防ぐ 愛国心の涵養、正義の戦争論肯定 「軍事の文化」の伝達と形成
展示内容	戦争の展示	侵略戦争、植民地支配 軍事的占領	祖国防衛戦争、独立戦争 解放戦争
	戦争体験の種類	悲惨な戦争被害体験 残虐な戦争加害体験	勝利の戦争体験 勇敢な戦闘体験 占領下の抵抗運動体験
	展示のテーマ	都市空襲、原爆被爆、強制労働、 住民虐殺、ホロコースト	軍事作戦の成功や戦果 軍事作戦のプロセス
	展示物	遺品、死傷を示すもの、武器・兵器、 遺影、被害資料	武器、武具、軍旗、軍服、勲章、 武器・兵器、兵士や兵器の勇姿
	人物の展示	民間人（非戦闘員）戦死者、戦傷 病者、平和活動家	軍人中心 手柄のあった将兵（英雄）
	人の行為の展示	戦争における非人道的行為 戦争防止や停止のための人道的行為	勇敢な愛国的戦闘行為 国家のための自己犠牲的行為
	開設経緯	開設時期	第二次大戦後
開設場所		特定国に偏在	多くの国に開設
開設主体		地方自治体、民間団体、国	軍隊（部隊）、国防省、民間団体

平和博物館で展示する戦争体験は、悲惨な戦争被害が中心で、残虐な加害体験なども展示される。展示で取り上げる具体的場面として、都市空襲や原爆被

爆や地上戦での被害状況、強制労働や捕虜虐待の様子、抑留体験、ホロコーストの実態、住民虐殺の様子などが展示され、戦争における非人道的行為を告発する。

展示物としては、そうした戦争場面での犠牲者の遺品や遺影、人々の負傷を示す写真、血痕が付いた衣服や遺品などの被害状況を明示する資料などが展示される。平和博物館で写真などにより展示される人物は民間人が中心であり、傷ついた母や子どもや老人などの非戦闘員が多く取り上げられ、軍人の場合でも戦闘による死者であったり傷病者であったりする。

このような展示を行う平和博物館が持つ潜在的機能として、いかなる戦争にも反対する平和主義に入館者を導いたり、戦争につながる愛国心への不信感を起こすことなどが挙げられよう。欧米に多い平和活動を紹介する平和博物館では、平和活動家、平和運動、人道的活動や行為を紹介し、人々を平和な社会形成の活動へと導く。

他方、外国や日本にある軍事博物館の設置目的は、軍隊の歴史や役割について広報し、自国が行った戦争の歴史を継承し、入館者の国防意識を啓発しようとするといえよう。軍事博物館におけるモニュメントは、祖国が行った戦争における戦争殉職者を顕彰することを目的としている。

軍事博物館で扱う戦争の展示は、祖国防衛戦争、独立戦争、解放戦争、などである。軍事博物館で展示される戦争場面は、勝利の戦争、戦争を勝利に導いた作戦や、苦況に耐えて敵に打ち勝つ場面、勇敢な戦闘場面などが絵や写真や模型を用いて展示される。勇敢な愛国的戦闘行為や、戦争時の国家への自己犠牲的行為が絵や写真やジオラマなどで顕彰される。

軍事博物館での展示物は、昔の武器や武具、華やかな軍旗や軍服や勲章、さらには戦闘機や戦車など近代的な兵器などである（ピカピカに復元されたものが多い）。展示では、軍事作戦の成功や戦果が強調され、軍事作戦のプロセスが展示のテーマになる。戦場における軍艦や飛行機の勇姿や、軍人の勇姿が写真や絵により展示されることも多い。規模の大きい軍事博物館では、戦車や軍用機などの兵器が多数展示される。また、米国空母イントレピッド（ニューヨーク）や英巡洋艦ベルファスト（ロンドン）などの大きい軍艦であれば、装備兵

器とともにその船内の船室が軍事博物館になっている。

軍事博物館では、人物としては軍人が中心に展示され、それは過去の戦争の英雄や有名な将軍や勝利に喜ぶ軍人などであり、民間人が展示されることは少ない。手柄のあった将軍の肖像画が飾られたり、銅像が置かれたりする。祖国のための防衛戦争における軍人達の勇敢な愛国的戦闘行為が継承されると同時に顕彰される。

こうした軍事博物館の潜在的機能としては、入館者に祖国防衛の気構えを啓発して愛国心を涵養し、軍事の文化を伝達しそれを支持する態度を広く社会成員に形成する。軍事博物館は祖国防衛や解放のための戦争は良い戦争であるという「正義の戦争」を肯定する立場に立っている。

戦争加害については平和博物館でも軍事博物館でも展示されている。だが、戦争加害の展示は、加害を受けた側と、加害を行った側では、その意味（見学者に対する機能）が異なる。

平和博物館では、「自国の」他国に対する戦争加害の反省は、自省という形で行われる。それにより戦争の非人間性を学習し、次の戦争で加害の立場に立たないことを心に銘記し、反戦平和の必要性を訴える。他方、軍事博物館では、戦争加害の告発は、他国が戦争加害を行うことを許してしまったことを反省し、戦争加害（侵略・住民虐殺・ホロコースト）をさせない防衛力の強化を説き国防意識の啓発を行う。さらに、戦争加害に対して積極的に軍事介入を行う「正義の戦争論」の有用性を入館者に示す。ファン・デン・ダンジェンは、過去の外国による戦争加害を伝える資料館は、加害国への反感を高める度合いに応じて、それは「平和博物館」とは分類できなくなる、という⁷。

（２）両博物館への社会的規定要因

日本と外国の軍事博物館と平和博物館への社会的規定要因としては、歴史的要因、政治的要因、地域的要因などがある。それらの影響は国により異なっている。以下、それらの要因が両博物館の展開にどのような影響を及ぼすかを、命題的にまとめる。

歴史的要因：

ヨーロッパの主要な国には、戦前からいくつかの軍事博物館が開設されていた⁸。アメリカや日本でも、1900年以前にすでに軍事博物館が開設されていた。それに比べて、世界各国で平和博物館がいくつも開設されるようになった時期は第二次大戦以降と遅く、また小規模な施設が多い。

第二次大戦の戦勝国である英米には、反戦平和主義的な平和博物館はほとんど開設されてない。ただし向平和博物館が開設されている。

第二次世界大戦での勝利の作戦を記念する博物館が、戦争終了後50年以上を経てからも開設されている（例えば、米と英のD-Day記念館）⁹。

第二次大戦で敗北した日本とドイツには、国民の中に反戦平和主義の広がりがあり、反戦的な平和博物館（ドイツでは歴史資料館）が多く開設されている。

敗戦国である日本とドイツでは、戦前にあった軍事博物館は、敗戦後の連合国による占領期間中に閉鎖された。占領終了後10年以上が経過した後、次第にそうした軍事博物館が再開された（例えば、日本の靖国神社の遊就館、第一術科学校の教育参考館など）。

特に日本には平和博物館が多数開設されており、平和博物館の多くは戦争被害体験（被爆体験、戦場体験、空襲体験、戦時下生活体験など）を継承する。戦争加害の反省を行う展示は少ない。

第二次大戦以後に起きた、戦争や紛争が終了した後、それらの当事国では何らかの軍事博物館や戦争メモリアルが開設されている。

1990年代になって、多数の平和博物館ならびに軍事博物館が開設されるようになった。

政治的要因：

ヨーロッパ、アジアなど軍隊を持っている国の多くは、自国が過去に行った戦争の史料保管と顕彰のため、何らかの軍事博物館的な施設を開設している。

軍隊が開設した軍事博物館は、軍隊の広報活動や軍人のリクルート活動のために利用される。

情報開示が進んだ社会では、軍隊も開かれていなくてはならず、軍隊についても広報活動を行うことが必要となる。

第二次大戦中にアメリカが解放軍の役割を担った国や地域では、アメリカ軍の戦争での活躍を展示する親米的な博物館が開設される（例えば、韓国の仁川上陸記念館、イギリスの戦争博物館ダックスフォード内のアメリカ館、ルクセンブルグのバストーニュ歴史センターなど）。

軍事博物館は、入館者に国防意識の啓発や愛国心の涵養などの政治的・社会化的機能を果たしている。同時に、一般大衆の軍隊への親近感を増し、軍事的教養を高める働きがある。

英米では、正義のためには軍事力の行使は必要だというのが国民のほぼ共通認識となっており、軍事博物館の開設に対して広い支持がある。

正義のためにはあえて武力を用いて戦う方針を持つ米軍がある。「正義の戦争」の立場はアメリカ国民の多くが支持する外交政策であり、それがアメリカにおける軍事博物館の開設と展示内容に影響を及ぼしている。イギリスやフランスも非戦主義ではなく、反戦平和主義に対する支持は強くない。

地域的要因：

平和博物館が開設された国より、軍事博物館が開設された国の方が数が多い。平和博物館の開設が不在の（少ない）アジア・中東・東ヨーロッパ地域にも、軍事博物館は開設されている。

戦争が起こって数年（数10年）が経過した後、歴史的な戦跡にその戦争（作戦、戦闘、戦災）についての博物館が開設される。

日本では過去の空襲被害体験を展示する、多くの反戦平和博物館が開設されている。

英米では、平和博物館の入館者数よりも軍事博物館への入館者数の方がはるかに多い。

アメリカでは軍事博物館が観光スポットや娯楽施設にもなっている。日本では、広島、長崎、沖縄の平和博物館のいくつかは地域の観光スポットとなっている。

(3) 結論

戦争を展示する博物館では、「戦争に関する集合的記憶」を現在まで保存・活性化する機能を果たしてきた。原爆被爆の集合的記憶が、広島平和記念資料館や長崎原爆資料館で保存・活性化されている。真珠湾奇襲攻撃がハワイのアリゾナ記念館で。ユダヤ人など民族皆殺しが、アウシュビツ博物館、ドイツのダハウ強制収容所記念跡地、ワシントンのホロコースト博物館、イギリス戦争博物館のホロコースト展示室などで継承されている。南京虐殺が、南京虐殺記念館で伝えられる。戦争体験を展示する各博物館は多数の入館者を集めており、それぞれの博物館では、ヒロシマ・ナガサキ、パールハーバー、アウシュビツ、ナンキンなどの保存されていた集合的記憶が、入館者に対して再生されて継承されることにより活性化されている。

戦争体験は平和志向の視点からだけで継承されているのではない。平和博物館と軍事博物館では戦争の扱い方が異なる。日本などにある平和博物館の社会的機能は、戦争体験を次世代に継承し、二度と戦争は繰り返してはならないという反省の意識と、平和希求の意志を形成することである。こうした平和博物館が持つ潜在的機能として、いかなる戦争にも反対する平和主義に人々を導いたり、戦争につながる愛国心への不信感を起こすことなどが挙げられる。

他方、軍事博物館の社会的機能は、自国が行った戦争の歴史を継承し特に祖国防衛戦争と解放戦争を伝え、その社会的機能として入館者の国防意識を啓発し、愛国心を涵養することである。軍事博物館での殉職した英雄の展示や、戦争記念モニュメントや、兵士のための国立墓地は、祖国が行った戦争における戦争殉職者を追悼・顕彰する作用がある。

世界各国には、平和博物館よりも多数の軍事博物館があり、平和博物館よりも軍事博物館の方が古い時期から開設されている。つまり平和博物館と比べて軍事博物館の方が開設数が多く、歴史も長く、そして規模も大きい。それだけ世界では軍事博物館の方が、人々に対して社会的機能が強く働き、影響力が大きいといえよう。アメリカの軍事博物館はアメリカ国民から広く支持されており、多数のアメリカ人が娯楽のためにも訪問している。

日本では、外国と比較して現在まで多数の平和博物館が開設されている。日本には、規模が大きい平和博物館がいくつもあり、平和博物館への入館者数は軍事博物館への入館者数よりもかなり多い。戦後の日本人の平和主義的意識が、平和博物館の開設を支持し展示内容を発展させており、そうした平和博物館が入館者を通じて平和主義的意識を広く社会成員に形成するという循環作用があるといえよう。この循環作用を国際的に広げていくことが日本の現在の課題といえよう。

註

- 1 村上登司文 1998 『平和博物館による戦争体験継承とこれからの役割』京都教育大学教育社会学研究室、pp.23-26。
- 2 帝国戦争博物館が平和博物館に分類されることもある (The United Nations Library at Geneva, The Archives of the League of Nations 1995, *Peace Museums Worldwide*, UNESCO Paris)
- 3 参考文献として、椎名仙卓 1989 「軍事博物館の誕生 “遊就館”」『博物館研究』24 (10) (1989.10) 山晋吾 1994 「軍事史関係資料館探訪 5 : 靖国神社遊就館」『軍事史学』30(1)。
- 4 全国陸軍博物館からの返信、"History of National Military Museum" による。
- 5 藤原洋 1999 「世界の軍事博物館シリーズ (3) 航空博物館・米国編 (1)」『防衛技術ジャーナル』19 (1) 1999.1。
- 6 Peter van den Dungen 1999, "Peace Education: Peace Museum", *Encyclopedia of Violence, Peace, and Conflict*, Volume 2, p.692.
- 7 Peter van den Dungen 1999, p.700.
- 8 J. Lee Westrate 1961 *European Military Museums: A Survey of Their Philosophy, Facilities, Programs, and Management*, Smithsonian Institution, Washington.
- 9 英米では通常D-Dayは、第二次大戦中に連合軍がフランスに上陸した日 (ノルマンディー上陸作戦の開始日) を示す。

参考文献

- Bjerstedt, Åke 1993, "Peace Museums as Potential Instruments of Peace Education: Viewpoints Expressed by Members of the PEC Network", *Education and Debate*, No.102 (Lund University, Sweden).
- 『世界平和ミュージアム交流会議報告書』大阪国際平和研究所、1991年
- 西田勝・平和研究室編 1995 『世界の平和博物館』日本図書センター
- 大阪国際平和研究所 1999、特集「第3回世界平和博物館会議報告書」『戦争と平和'99』大阪国際平和研究所紀要、Vol.8
- 歴史教育者協議会 2000 『新版 平和博物館・戦争資料館ガイドブック』青木書店